



東九州支部報

第112号

公益社団法人日本山岳会東九州支部
2026年1月25日(日)発行



忘年山行 天塢神岩屋入口にて表紙 2025.12.13)

もくじ

1. 支部活動	2. 個人投稿	
忘年山行・忘年会報告	2	ペンリレー（第55回）
喜寿お祝い登山報告・高崎山	3	追悼文 西孝子さんを偲んで
第6回登山教室・実地一目山～みそこぶし山	3	個人山行 懐かしい金剛山に
10月月例山行 市房山	4	こぎこぎ俱楽部山行 生木峠と大峠の探索
11月月例山行 岳滅鬼山～英彦山	5	こぎこぎ俱楽部山行 佐賀県の子午線標
懸垂下降練習会	6	女子会 個人山行
アップスキング 雪山研修①	7	私の無名山ガイドブック・No99
アップスキング 雪山研修②	8	古典「山岳」拾い読み No10
五支部集会 熊本支部主催に参加して	9	より安全な登山のために(No60)
関西支部90周年記念の報告	10	3. お知らせコーナー
宮崎ウェ斯顿祭に参加して	11	図書の紹介 大分県の三角点
本部120周年記念 年次懇親会の報告	12	支部からの報告ほか
国際友好山岳会来賓歓迎会	13	後記

忘年山行

妙見岩屋～天疫神岩屋

今川 美智子(会員 15735)

2025年12月13日(土) 曇り、外気温 6°C

国東の朝はやはり寒い。10時前、旧千燈寺駐車場は我ら山岳会の車で一杯になった。世話役の佐藤彰さんの点呼の下お馴染みの顔、お久しぶりの顔、総勢37名が揃い歩き始める。

国東半島は小さな山々が群立っていて、これらの多くの中腹や山麓に寺院があり岩屋や修行場等も点在している。今日は一つ目の目的地 妙見岩屋も古の彼方の産物で林の中の石段を登って行った先に石段の上に作られた屋根付きの木造だがもうかなり廃墟化していた。次の天疫神岩屋は、知る人ぞ知るルートでマニアックな人でないと辿り着けない場所にあり、私達も行き着くまでに藪漕ぎやらロープワークやら足元に注意する必要があった。天疫神(てんやくじん)をクグると疫病をもたらすと考えられた神様のことで疫病神、行疫神とも呼ばれ、人々に災いや病気をもたらす悪神とされてきたが、その神を鎮めたり祀ったりすることで、災厄を払い、人々の健康や平安を守るという信仰と深く結びついていることを知った。

午後1時を回った頃、天気予報よりも早く小雨が降り出した。不用意に傘もレインコートも忘れてしまった私は時折濡れはしたが、タオル1枚でなんとかしのいだ。山登りする者にとっての大事な神具を忘れるとはまだ若輩者なのであった。薬師岩屋にも寄り旧千燈寺本堂跡で最後の集合写真を撮り、車を置いてある場所まで戻り安東支部



長が終わりの言葉で“自分の山を少しでも高くしましょう”と言われたのが心に残り自分なりに考えてみた。いつでもどこへ行くでも人に連れて行ってもらうのではなく自分がどうしたいのか、どんな山へ登りたいのか自分流のスタイルを追求し

てみる。自分自身を高める努力をすることによって視野と器が広がり、困難や心配事等に対しても展望が開けてくるのではないだろうか。

成長とは知識やスキルの習得、チャレンジする姿勢、メンタルの強化といったことではないだろうか。おおよそ歩行5時間。距離6.5km 午後3時解散。

参加者…安東、阿南、飯田(勝)、鹿島、中野(稔)、櫻井、宮原、工藤、今川(美)、佐藤(裕)、深草、佐藤(彰)、平原(健)、笠井、山村、中野(梨)、河村、大前、佐藤(美)、松村、後藤、清水(道)、古谷(耕)、平原(瑞)、榎園、古谷(あ)、飛高、井村、中島、興梠、皿山、丸井(弘)、丸井(元)、井口、土谷(美)、境 計36名

忘年会

～横岳荘にて～

今川 美智子(会員 15735)

2025年12月13日(土) 午後17時30分～

日帰り登山の人が多い中、私達10数名は車で約30分の昨年も利用した横岳荘に到着した。若干人が入れ替わり18名参加。ここの支配人は気さくなフレンドリーな人で、今日行ったマイナーな天疫神岩屋に興味津々、食いついてきた。国東のガイドもされているらしい。

午後6時本館を出でてすぐの食事処「夢のぼり」で忘年会が始まる。安東支部長の挨拶、加藤元支部長が音頭をとりビールで乾杯する。そして新入会員の一色浩幸さんを紹介された。この方は、大分県山岳遭難対策協議会別府分隊長という地域の貢献活動を担っている人です。お酒が入るとだんだんと場が賑やかになり、鷺来屋(たかきや)智恵美人等が飛び交って、私は目の前が回り始めていた。加藤さん、安東さん山の歌を歌い始める。山男は歌が好きだあれ恒例の坊がつる讃歌を歌ったかな…。その後本館に戻り、少人数で2次会をしたがもう私はほとんど覚えてはいない。

翌朝、支配人の趣味の本格派コーヒーを女性4人でルワンダ産のコーヒー豆を挽き頂く。遠く佐田岬を見ながら雨上がりの空は美しく澄んでいて、コーヒーの香りに包まれて至福を味わった。

7時半過ぎ、夢のぼりのお姉さんがいそいそと調理した何種類ものおかずを持参し、女性達も一緒に手早くお皿に盛り付けを手伝った。名物の宝

めしの中には、栗、銀杏、枝豆、小豆等が入っていて美味しかった。ここの看板メニューらしい。朝食後自由解散で各自横岳荘を後にした。



横岳荘（夢のほり）にて

参加者・・・佐藤(彰)、首藤、加藤、阿南、安東、飯田(勝)、中野(稔)、下川、石神、宮原、今川(美)、深草、中野(梨)、大前、一色、小竹、石川、中島
計 18名

喜寿お祝い登山 高崎山 (628m) 深草秀昭(会員 16646)

2025年11月2日(日) 曇り午後から晴れ
支部恒例の「喜寿お祝い登山」を開催した。秋は深まり山行にはほどよい肌の感覚であった。熊の心配こそないがイノシシの活動跡は頂上に至るまで路の傍らに確認することができた。門司の風師山では登山している日中でも遭遇することがあると聞き及んでいたので用心したものである。

さて、8時に銭瓶峠駐車場に集合して点呼を終えてから中野(稔)リーダーの指導により手足の屈伸準備体操をした。8時30分には「喜寿お祝い登山」の開始である。頂上での催事に使用する飲食物は、役員が手分けしてリュックに入れて運んだ。11時には全員が頂上に集合できた。頂上の角錐マークを背景にして別府湾を眺めながら飯田顧問がカメラマンとなって記念の集合写真を撮る。その後、喜寿該当者 岐部威吉、後藤英文、雪野佐喜子、飯田ひとみ、青木美代子さんの5名を披露した後、欠席者2名を除いた3名、後藤(英)さん、飯田(ひ)さん、青木(美)さん一人ひとりに自己紹介と挨拶をすることを促した。3名が挨拶をした後、安東支部長が3名一人ひとりの人柄の紹介を交えてお祝いの言葉を述べた。同時に喜寿のお祝いの品を一人ひとりに手渡しした。

その後、テーブル席に移り宴の始まりである。紙コップに甘酒を満たして加藤前支部長の音頭で乾杯をした。加藤さんのハーモニカの演奏で“雪山賛歌”と“坊がつる讃歌”を合唱した。加藤さんのリードボーカルによる合唱は他の支部の催しでも東九州支部の出し物として今や欠かせないもの

だなあ~~~~と感じる。疑似アルコールを飲み乍ら結構盛り上がり、皆が歓談に耽っていた。各自持参の弁当を食べ終えてからキレイに跡始末をして解散・・・・全員無事に下山した。祝喜寿！！
参加者・・・中野(稔)CL、加藤、安東、飯田(勝)、石神、櫻井、工藤、深草、中野(梨)、河村、大前、一色、松村、石川、長野、宮本、後藤、清水(道)、清水(久)、飯田(ひ)、平原(瑞)、榎園、古谷(あ)、青木、飛高、阿部、井村、中島、高橋、丸井(弘)、丸井(元)、土谷(美)、境 計 33名



高崎山山頂で

第6回 登山教室 実地 一目山 (1,287m)・みそこぶし山 (1,299m) 興梠晃子(会友 268)

2025年10月26日(日) 晴れ
九重森林公园スキー場 8時30分集合

笠井さんの掛け声によるラジオ体操をした後、班ごとに集合しました。班は5班あり、リーダー1班は田所さん、2班は笠井さん、3班は平原(健)さん、4班は佐藤(彰)さん、5班は廣瀬(健)さんです。

始めに佐藤(裕)総括から、佐藤(裕)さんが作成してくださった研修のテキストによるコンパスと地図の整置の説明がありました。9時26分に出発！天気は晴れでコンパス研修日和でした。久住高原を通る時は、霧で前が見えにくくて研修中の天気を心配しましたが、スキー場に着くと、晴れて見通しが良かったです。登山口で地図の整置をして一目山に登りました。一目山の登り道にりんどうの花が右に左にと何箇所も咲いていて、前を歩いている方が、「りんどうが出迎えてくれてるね！」と言っていました。

頂上で、小休憩をした後、集合写真を撮り、みそこぶし方面に向かって下った。登山道は前日の雨でぬかるんでいたので滑らないように気を付けた。下の広い場所で地図とコンパスで位置確認・方位確認をしました。「全員が出来た班から出発！」と

佐藤(裕)さんが言うと、皆、真剣になりました。テキストの地図に丸印をつけてくれていて班ごとに丸印の場所で、地図を用いて地形の特徴の確認をしました。

みそこぶし山の頂上でお昼休憩。写真撮影をした後、周りに見える山々の中から黒岩山の方位・方角を地図とコンパスで確認しました。天気が良く景色も遠くまで見えて良かったです。夏の猛暑の影響か、紅葉の色が今ひとつようでした。みそこぶし山を下山して歩道を行くと、一目山の側面側と横に連なる丘一面にスキが広がり、風に揺れて綺麗でした。

登山口に着くとコンパスで駐車場の方角を測りました。佐藤(裕)さんの解説の数字と自分のコンパスの指している数字がほぼ同じだったので、納得してとても満足しました。



一目山(1,287m)山頂にて

集合場所で、教室生から感想を聞きました。良い研修になったようでした。14時50分頃解散しました。コンパス研修の参加は、私は3回目です。毎回、とても勉強になります。研修が終わった後、その時に分かったつもりでも常時使わないので、コンパスの使い方はどうだったかな?と思うところがありました。今年の研修では、内容が良く理解できました。コンパスの使い方を忘れないように、時々、コンパスと地図を持って散歩しようと思います。

参加者・・・佐藤(裕)総括、田所、櫻井、佐藤(彰)、平原(健)、笠井、廣瀬、大前、佐藤(美)、平原(瑞)、飛高、興梠、矢野、古山 支部14人 受講生10名 合計24人

良村から登るルートがある。今回は市房神社側からのメインルートから登る。私はこのルートを過去にほぼ10年ごとに2度登っているが、ルートの記憶はない。記憶にあるのは登山口に東屋があって朝から地元のおじさん方が酒盛りをしていて「飲まんね」と誘われたこと。登山前に飲むわけもないかず「ありがとうございます。」と言葉を交わして登ったことを記憶している。麓にキャンプ場があったが、3年前にキャンプ場が改修されたことをネットで知り、以前は近くのホテルに泊まって登っていたが、たまにはキャンプも良いかなとコテージを借りた。夜はBBQで英気を養う。大分から総勢19名と大所帯で、車5台で移動した。

翌朝、当日参加者1名が予定時刻より早く到着し、それに合わせてキャンプ場の駐車場に集合。体操して予定よりも15分早く7時45分に出発。この日の天気予報は曇り一時雨。雲の切れ間もあって天気は持ちそうだ。キャンプ場横の道を5分ほど登ると神社の鳥居があり、ここが登山口。鳥居の横に登山届の箱があって熊本県警察本部はYAMAPによる登山届が推奨されている。事前に届を出していたので、YAMAPの「活動開始」ボタンを押すと見守られているようだ(?)。鳥居から約1時間、石畳もある登山道を登ると神社に到着。コンクリート造りの社屋は大きな部屋が2つ。片方の部屋に祭壇がありこの日の安全を祈る。神社が4合目。ここからが急登になる。5合目、6合目、7合目と1合ごとに休憩する。6号目くらいまでは話し声も聞こえていたが、7合目まで来ると皆疲労の色が見えてくる。7合目からはやや坂が緩くなってくるものの、疲労が蓄積され体が重い。このあたりから森林が開けてきて頂に向かってはげ山のようになっている。スズタケが消えた影響だろうか?以前登ったときはもっと森だったような気がする。8合目付近から頂上がチラチラと見えて「あと少し」と元気が出てくる。9合目の小休止が済んで出発した直後、8合目手前に「もう無理」と置いてきた1名が気になり、後ろを振り返ったところよく似た人が登ってきているではないか。よくよく目をこらしてみるとその本人であった。本体最後尾を行くサブリーダーに「連れて行くから先に行って」と声をかけ、遅れた1名とゆっくり登る。聞けば頂上から下りてきた同様の人数の団体に「もう少し」と励まされたらし

10月例山行

市房山(1,721m)

佐藤秀二(会員13141)

2025年10月18日(土)・19日(日)

市房山は熊本県水上村と宮崎県西米良村の間にある県境の山。市房神社側から登るルートと西米

い。本体は11時45分に頂上に到着。我々2人は15分ほど遅れて山頂に到着した。

頂上では月例山行の2日前に他界された西元事務局長がやっていた東九州支部名物「ヤッホー！」をやって追悼させていただいた。高校山岳部時代から約40年の間お世話になりました。(合掌)



このあと、西米良側から登ってきた陸上部の小学2年生から6年生の少年団と談笑。日本山岳会に入る人はいないかと思いつつ言葉を交わしていた。帰り際に全員で記念撮影し下山開始。5分ほど下ったところで頂上から「バイバーイ」と少年団が手を振る。こちらも「バイバーイ」と手を振り返して一期一会の別れを惜しんだ。

午後1時に山頂を出発天気も崩れることなく下っていたが、6合目を過ぎて雨の葉音が聞こえてきた。すぐに雨が降り出しきなりの雷鳴。雨具を着用し、4合目の神社まで足下に気をつけながら急いで下る。幸い雨は激しくならず、神社に到着できた。神社で雨宿りし雨が止むのを待つ。やや小降りになったので、点呼をして出発。石畳が雨で滑りやすい。大きめの岩に乗ったら両足が同時に滑って転倒し、お尻から腰にかけて岩に強打した。6月に腰の手術をして2度目の山行。腰に痛みが走る。他のメンバーには、すぐ先の林道へ出る分岐点まで行ってもらい、腰の痛みの様子を見る。思ったより早く痛みが引き出したのすぐに後を追う。雨は止まないし石畳はまだ何力所があるのでこのまま林道へ出た。ここからキャンプ場の駐車場へ歩く。疲労度の高い人は車で拾って、午後4時に全員無事にキャンプ場の駐車場に到着した。

参加者・・・佐藤(秀)CL、今川(美)、丹生、大渡、佐藤(裕)、尾家、河野、久知良、山村、木下、佐藤(美)、柳瀬、清水(道)、清水(久)、松浦、賀来、榎園、飛高、諸田、中島 計20名

11月月例山行 岳滅鬼山～英彦山

中島 洋祐(会友260)

2025年11月16日(日) 晴れ

山行計画・・・6:45 鬼杉駐車場集合→7:00出発→8:15 岳滅鬼峠→9:30 岳滅鬼山→10:30 岳滅鬼峠→12:00 石楠花の頭(昼食)→13:30 猫の丸尾→15:00 鹿の角→15:30 英彦山南岳→17:00 鬼杉駐車場

6:45、鬼杉駐車場に全員集合。挨拶と準備体操後、山行を開始。まだ薄暗い夜明け前、杉木立の間から見上げると、糸のように細い三日月が神秘的である。約40分、林道を歩くと登山道に入る。30分で岳滅鬼峠に到着。ここには古い国境標柱が2柱ある。一つは江戸時代の豊後・豊前の国境碑石で、他はそれより古い国境標識の碑石である。

ここ岳滅鬼峠から岳滅鬼岳・岳滅鬼山までは厳しい急登となる。滑り易い急斜面を岩、根、鎖、梯子を頼りに3点確保しながら、65キロの体を持ち上げるには多量のエネルギーが必要であり、疲れ果てる。この様な厳しいup and downが3回続くと岳滅鬼岳(1050m)に着き、5分余りで岳滅鬼山(1042m)の山頂である。達成感に満たされるが、疲労困憊である。数分後、同じup and downのルートを、滑落しないよう慎重に岳滅鬼峠まで下る。



今度は正面の急登を1時間かけ、「石楠花の頭」まで登る。危なくはないが、厳しい、長い急登が続き疲労困憊する。全員が早足で、計画より早く到着。座り易い、日当たりを避けた場所で昼食。20分の昼食時間の後、再び同様の急斜面を30分程下る。途中に「蟹の横ばい」を思い出させる難所がある。体を支えるロープや鉄のワイヤーはあるが、足場

は小さな岩の突起が数個だけ。それでも全員が無事通過する。再び急斜面を40分登ると「猫の丸尾」に到着。昼食でエネルギーを補充した為、全員元気に斜面を登る。更に急登を下り始めると、「ヤッホー」の声。飯田さん達のグループと思い「ヤッホー」を返す。「鹿の角」大岩壁の下の龍水峠で男性が寝そべっている。それは飯田さんで、井村、清水さんが「鹿の角」ピストンしてくるのを寝て待っている。3名の仲間と暫し雑談して、飯田さんグループは、鬼杉へのトランバース気味の登山道を行くので、彼らに別れを告げる。

「鹿の角」に立ち寄り、南岳大岩壁のほとんど垂直と思える「鬼の舌」に取り付く。岩場に手足をかけ、根にしがみ付き、3点を確保して、1歩1歩確実に登る。滑落を避けるのに必死で、時間の経過を忘れ、疲労を感じない。12:30頃、一等三角点が在る英彦山南岳山頂(1199.3m)に立つ。厳しい、危険な登りだが、終わってしまえば気分は爽快。

給水と写真撮影後、大小の岩がゴロゴロしている岩場や数か所の鎖場を経過し、鬼杉まで足早に下る。途中、「材木石」があり、それは板状の巨岩が波のように重なっている。更に大小の石が石段のように続くルートを下る。岩場の下りが続くため足が痛む。薬を飲み、痛みに耐えて「鬼杉」まで下山。この鬼杉は1200年も生きて来た威厳ある杉の巨木で、昔から修験者や登山者を眺めて来た。鬼杉から15分で駐車場に到着。日没前の山行終了は計画通り。全員が事故・怪我もなく、登山の終了を喜び、万歳三唱。このルートは私には、「槍穂縦走」より厳しい様に思われる。剣岳の「蟹の横ばい」や甲斐駒ヶ岳・黒尾根「刃渡り」を思い出す。私が途中で離脱せず、完登できたのはリーダーの中野さん、気遣いをしてくれた奥さん、強くて逞しく、心優しい同行の人々のお陰である。

参加者・・・中野(稔)CL、佐藤(裕)SL、飯田(勝)、山村、中野(梨)、佐藤(美)、清水(道)、榎園、井村、中島 計10名

懸垂下降練習会

(遭難対策部・山行部企画)

土谷 美穂(会友286)

2025年10月5日(日)

今日は、懸垂下降と、バックアップをとった懸垂下降を体験させて頂きました。場所は、日出町

石鎚神社の登山道と岩場。8時に、日出町黒岩公園集合。着いて、すぐ田所さんが、初参加者3人に、黒いひもをくれました…その時は、なにかわからず、黒い丈夫なひもにしか見てないけどなんか嬉しい。※ バックアップを取るための「ブルージップコード」でした。さっそく、笠井さんから、ハーネスを借りて装着。ハーネスをつけた時から、今日は、のんびり見学とはいかないと思い、だんだん無口になってくる。みんなが揃ったところで、車で石鎚神社へ移動。今日は、13人。ヘルメットをつけ、懸垂下降に必要なものを、ハーネスにつけてもらった。ハーネスやカラビナ等の道具を使って自分で安全確保することを「セルフブレイ」というらしい。ひとつのカラビナには、必ず、ひとつのものをつけることを教わった。出発～道路脇からすぐ山道に入る。私には、ハードすぎる山道を登りきる。すでに、息切れ、汗だくで、へたってる…場合じゃない。すぐに、田所さんと、下坂さんの指導が始まり、カラビナに色々種類がある事などを教えてもらった。私は、聞き逃さないようにと耳をダンボにして聞いていると、聞きなれない用語がたくさん出てきて、???になり、頭の中のストッパーがかかって、次の話が入ってこない。いよいよ、実践～まずは、支点に身体を確保するスリングを付ける。エイト環とロープをつなぐ。ロープが緩んだりしてないかなどの確認…いざ、降りる…あれ、全然下降する感覚がない。もっと体重をかけて～腰を落として～という声が聞こえる。怖がってる場合じゃない。とにかく 後ろに倒れる感じで、中腰になってロープを引っ張る(表現が難しい)。すると、ロープが緩んだ感覚がわかった。なるほど～。そうなると、スルスルと降りて行く。いやいや、スルスルはオーバー。やはり怖さが優先して、なかなか上手いこといかないが、隣で、笠井さんが、声をかけながら一緒に降りてくれたおかげで、怖さが半減し、なんとか下まで行くことができた。2度～3度やると、少し感覚がつかめてきた。しかし、岩があったり、木の枝に引っかかったり、焦ってしまう。練習じゃなから、こんなに、のんびりしてられないね。場所を変えての練習。かなり急な岩場。それも、苔で滑りそう…安東支部長が、滑るかもしれない気を付けて、という言葉に、ますます怖さ倍増。2人～3人で、身体をロープでつなぎ、上がっていく。私は、田所さんとペア。河村さんが「いいなあ！！」

と、声をかけてくれた。耳には入ってるが、いっぱいいいっぱいで、返す余裕がない。手袋を外すよう言われる…腕時計等も外し、慌ててザックにしまいこんだ。岩場などでは、素手の方が感触が伝わりやすく、指先で岩を掴んだりするそうです。苔のフワフワした感触がしたことを思い出した。先に、田所さんが上がっていく。ロープがピンと張ったところで、私の番…足を上げると、田所さんが結構な力で引っ張る。しかし、体・足・頭がついてかない…何とか 登りきった…と、いうか引っ張りあげてもらった。ふう！みんなが、上り終えたころ、私の腹時計…いや お腹のサイレンがなった。いつの間にか、あっという間に時間がたってた。次は、いよいよ懸垂下降～安東支部長から、手袋



をつけてと言われ、下に置いてきたと言うと、笠井さんが、自分のを外して貸してくれた…反省。エイト環に、ロープをつないで、慎重に降りていく。

途中で、2度エイト環の輪の中で ロープが絡まる。今思い出しても、どおなってたか説明できない。最初のかけ方が悪かったのかな。なんとか降りきったけど、足がガクガクしてた。大前さんが、途中で横に大きく振られたが、笑顔で降りてきた。あとで本人に聞くと、全然平気だったとか…見てた私の方が ビビりまくり。安東支部長が、「終わったら、前に付けてたものは、すぐ付け替えてブラブラさせない」と、もう一言(?)付け加えて、和ませてくれた。初参加者3人は、ヒヤヒヤしながらも無事やり切り、経験のある人達は、余裕のよっちゃんだったね。バックアップをとった懸垂下降も丁寧に教えて頂いたが、どおしても思い出せない行程があったり、下降中にロープから手を離したり、エイト環を落したりと、いろいろ反省することばかりです。今回声をかけてもらったおかげで、絶対やらないと思ってた事に挑戦ができ、

楽しく勉強させて頂きました。一皮むけた…いや、甘皮くらいむけたかな。機会があれば、ぜひまたご指導お願いします。ありがとうございました。参加者…・安東総括、田所CL、笠井SL、中野(稔)、佐藤(裕)、佐藤(彰)、上野、河村、廣瀬、橋本、諸田、土谷(美)

アップスクリーニング雪山研修①

高崎山大谷

諸田 佳正 (会友 246)

2025年11月8日(土) 晴れ

高崎山第3駐車場 8時30分に集合し点呼、5名(1名欠席)支部長 安東さん挨拶の後に出発。途中、高崎山の事務所にて挨拶し山の奥に進み、30分ほどで大谷到着。目の前に大きな岩壁、高さ20mほどあります。この壁を登るのだなあと…。私のクライミング初体験となります。到着してすぐ安東さんよりご教示いただいたことは、①アイゼン装着時は利き足ではない方から、座らず立った状態でなるべく片手で行う。落石等により咄嗟に動ける姿勢。また、凍傷や怪我の防止のため手袋をしたまま装着すること。②いつ上から何が落ちてくるか分からないので、ヘルメットは常に被っておくこと。③アイゼンが足の一部になる様に慣れること。④一つのミスが大きな事故に繋がるのでお互いの意思疎通が必要。と、学びました。

先ず登攀の前に、雪山で降り積もった積雪や薄い氷を剥ぎ落す作業を想定した、岩壁に生えている草やコケを落とし、ウォーミングアップに3m程度の比較的登り易いところを、登山靴のまま2度、3度と登った。その後、アイゼンを装着してチャレンジしましたが、同じところを登ってるのに爪が引っ掛かる感覚が分からず苦労しましたが、なんとか登ることが出来ました。

いよいよ本日の本題、リード(先登者)で安東さん登攀。クイックドローを掛けながらスルスルと登っていきトップロープを設営。どうやって登ったかを脳裏に焼き付けたつもりでしたが…。3番目、いよいよ私の順番となり緊張する。画像では分かりにくいですが、左側にある恐竜の背中の様なデコボコ部分を15m、右に2m トラバース、核心部分を5m 登るルートとなります。恐竜の背中は比較的明確なホールド(掴むところ)があり、

アイゼンの爪に体重を載せられるか不安になりながらも、腕力に物を言わせ何とか両足で立つことが出来る平坦な場所まで登れました。ここまで上だけを見る様に心



がけていましたが、少し安心して下を見るとびっくりするぐらい高い所まで来ていました(怖度50%)。

次にトラバース。最初の一歩が怖かったですが、前に登った方の踏み跡を探し踏み出す。体感的に90度の壁、一生懸命ホールドを探すがなかなか見つからない。徐々に息は上り腕も疲れてくる(怖度80%)。後に教えて頂いたのですが、右足からではなく左足から踏み出せば、次の一步が踏み出し易かったそうです。

最後の核心部分となる5m。小さな凹凸に手を掛け、足を掛け、少しづつ登り進めましたが、最後の2mが登れない(怖度120%)。困り果てる私に安東さんが「左の上」と教えてくれるも、目いっぱい腕を伸ばさないと届かない。大きく背伸びする様に左腕を伸ばし掴んだ。大きなホールドだったので両手で掴み直し、最後の力をふり絞り重たい体を持ち上げ、最後は這いつくばる格好で何とか登ることが出来ました。(2回ほどトップロープの助けを借りましたが・・・)両手両足の筋肉はパンパン、疲労困憊でした。これが私の記念すべき初登攀となりました。

今回の研修では、達成感、爽快感を得ることは出来ませんでしたが、完登出来てれば違ったのかも知れません。次回、完登を目指してチャレンジしたいと思いますが、11/30の二回目も完登できずでした。

参加者・・・安東CL、笠井、上野、廣瀬、諸田 計5名

アップスクリーニング雪山研修②

高崎山大谷

河村典子(会員17342)

2025年11月30日(日)晴れ

初めてアイゼンワーク研修に参加させてもらつた。ベテランの方の参加も多く、たくさんご指導をしていただいた。

今回は12本爪アイゼンを装着しての体験だつたが、私は九州の山歩きもしくは、夏の北アルプス歩きしかしておらず、まだ冬用登山靴も持たずチェーンアイゼンしか持っていない状況だった。いつも親切にしてくださる会員の方に12本爪アイゼンをお借りしての参加となつた。

第三駐車場から高崎山大谷まで4~5基の砂防堰堤を横目に歩き約30分かけて岩場へ到着。本日のリーダー安東支部長より、チェーンアイゼンと12本爪アイゼンの用途の違いや、アイゼンをどんな場所で安全確保しながら装着するのか、またなぜ安全確保して装着しなければならないのか。アイゼンは前爪を使い斜面を蹴りこんで食い込ませることで滑落を防ぎながら使う。凍結している硬い雪面や凍って滑る氷上で使用し、新しい雪がたくさんある所や雪深い所(←ここではスノーシューやワカンが最適)で使う訳ではないなど詳しい説明を受け準備体操後研修開始となつた。

私はアイゼンを靴に装着するのにも苦戦した。一般的にアイゼンを装着する冬用登山靴はソールが非常に硬くコバ(アイゼンをワンタッチで装着できる溝)がある。私がお借りした物は、私の登山靴にはコバが無いのでベルトで靴を締め上げる感じになる。装着感はとにかく歩きにくい。こんな感じで岩場に登れるのかと不安になつた。

まず前爪で岩の裂け目などに爪をかけて登る練習。足先(靴の中で足指は蛇を掴む感覚にする!?)を意識してグググッと登っていく。思ったよりも、面白い。平面を歩くより岩を上るほうがグリップ力が増して登りやすいと感じた。そして何度もかけやすく掴みどころもたくさんあるのでスイスイ登れたが、途中少しオーバーハング気味の場所で苦戦し、ピーク直前で足を上手くかませる場所が見つからずまたもや苦戦し足をフルフルさせながらなんとか登頂した。岩にガシッと掛かっ



たアイゼンの前爪を信じて登ればできるんだなと思った。降りるのはもう何度か体験している懸垂下降。コツを少しづつ習得しているので注意してスルスルと降りることができた。

今回の研修では、支部長をはじめベテランの先輩方に「なぜそうするのか」など詳しいご指導を受けすごく勉強になった。広い範囲で技術を磨いて少しでも厳しい山に挑戦できたらいいなと改めて思った。皆さま本当にありがとうございました。参加者・・・安東CL、佐藤(裕)、河村、廣瀬、佐藤(美)、下坂、一色、諸田

九州五支部懇談会 熊本支部主催に参加して

阿南寿範(会員9169)

2025年9月20日(土)~21日(日)

今回で16回目となる九州五支部懇談会が、熊本支部主催で2025年9月20日~21日に、阿蘇草原保全活動センター・阿蘇プラザホテルで開催された。平成29年に北九州支部で開催、2023年(令和5年)に東九州支部で開催され、2025年(令和7年)は、ここ熊本支部の開催となった。2年に一度の開催である。

福岡支部2名、北九州支部7名、東九州支部13名、宮崎支部6名、熊本支部20名、参加者は総勢48名であった。会場は、阿蘇草原保全活動セ



ンターの多目的会議室(この施設は環境省と阿蘇市が建設し2015年(平成27年4月)オープンした施設。)で13時30分より始まった。今回のテーマは山岳古道調査、日本山岳会120周年記念事業の一環として行われた山岳古道調査(九州版)の成果を各支部持ち時間を30分程度で発表するものであった。福岡支部、北九州支部、東九州支部、宮崎支部、熊本支部の順で発表。福岡支部は、柴田支部長が108対馬 佐須坂三里(公開)と111英彦山峯入り道(公開)を報告された。北九州支部は、榎監事が110求菩提山古道を報告され、東九州支部安東支部長は、109国東半島祈りと修行の道(公開)を報告された。宮崎支部では、4名の方が発表。荒武前支部長は、115椎葉村の霧立山・向霧立越を、日高支部長は116霧島山(高千穂峰)を、服部山行委員長は、117薩摩街道高岡筋を、橋口事務局長は、118飫肥街道椿山峠をそれぞれ報告した。最後に熊本支部は、土井支部長が、阿蘇山 馬ノ背・駒坂峠を報告。どれも熱意の籠る報告(発表)で定刻時間過ぎるものとなった。

発表の内容については、割愛させていただきますので、日本山岳会ホームページを検索して下さい。

全ての発表が終わり、記念写真撮影を隣室の展示スペース会場で行い、懇親会場(阿蘇プラザホテル)に移動した。

<懇親会>

懇親会場の阿蘇プラザホテルへは南西に車で約1分の所にあり、それぞれ乗ってきた自家用車で移動。ここでは各支部持ち回りで支部の活動報告や支部の抱える問題点(各支部約5分)を話し合う予定となっている。

各支部のお祝いの酒が壇上に並べられ会場の雰囲気は整った。懇親会は18時より熊本土井支部長の歓迎のあいさつから始まり乾杯後、酔いの回る前に各支部持ち回りで話した。どの支部も同じ課題(会員減少)、若い会員の獲得の難しさ等々問題を抱える、空腹感が増す中で、今回もこの問題の解決に至らず平行線のままにぎやかに宴会は進んだ。途中、熊本支部会員によるギター演奏、余興もあり大いに盛り上がった。宴も終盤に差し掛かると、東九州支部加藤顧問が、今年8月に増補決定版として発売された(坊がつる賛歌_誕生物語)本を紹介し、壇上に上がり支部皆で「坊がつる賛歌」を合唱して会を閉めた。

この後、勢いは二次会へと続くが、明日の山行を考慮し22時過ぎお開きとなった。

＜記念山行＞

朝方まで不安定な天気が続いたが、日中は雨の心配もなさそうだ。この日は登山コースと観光コースとに分かれたが、観光コースの参加者は2名のみ、ほとんどの方々が登山コースに参加した。7時に朝食・出発準備、7時30分ホテル出発、それぞれの自家用車に乗り込み登山口へ。

登山口の駐車場スペースは阿蘇山山頂へ向かう観光用山岳道路で交通量が非常に多く危険なため、走る車に注意しながら、200mほど登り左脇の牧柵を越え刈り込まれた草道に入る。一面草原の中であるためどこでも歩けそうだが、ほとんどが放牧地(肥後赤牛)であり、個人所有(牧野組合の管理地)となっている。そのため立ち入りは許可が必要。10年ほど前の口蹄疫発生後には立ち入りが禁止され、それから外国人観光客も増えて現在も立ち入りが厳禁となっている。今回は熊本支部関係者のご尽力により特別に許可を頂いて立ち入らせてもらった。



この「馬の背ルート」周辺は、観光道路開通により左右の山腹は眺めるものであると認識していたが、これまで一度も入ったことのないこのルートに、その谷筋尾根筋がどのようにになっているのか興味をもって参加した。今回晴れていたからこそ目的ルートを満足に登山できたが、ガス等悪天候であれば、この紹介ルートは、まともに歩くことは難しいと感じました。(全行程4:50) 現在の進化した道路(観光開発道路)と古道を比較体験できる場所はないと思う。熊本支部の方々のルート整備に感謝いたします。

参加者・・・安東、首藤、加藤、阿南、飯田(勝)、中野(穂)、佐藤(裕)、深草、工藤、中野(梨)、上野、清水(道)、清水(久)

関西支部創立90周年記念・
全国支部懇親会に参加して

飯田勝之(会員10912)

2025年10月25日(日)・26日(月)

記念式典と懇親会

関西支部創立90周年式典と第38回全国支部懇親会に出席してきた。私は10年前の同支部80周年式典にも参加した記憶がある。20年以上も東九州支部のゲストとして毎年の忘年登山と忘年会やその他の機会に顔を出してくださった、元同支部長で元本会副会長の重廣恒夫さんとのお付き合いだ。

10月26日(日)11時59分、私は新大阪駅に降り立った。幾度となく通過したり乗り換えたりしたことはあるが、下車したのは初めての駅だ。慣れない駅の改札を出てキヨロキヨロしていたら、丁度運よく目の前に関西支部の方がいて、私の身なりを見て参加者と分かり、ホテルへのシャトルバスまでのルートを丁寧に教えてくれた。それがなければ、広い駅の人混みの中で完全に迷子になるところだった。

会場の「大阪ガーデンホテル」で、開会の50分も前から受付を済ませ、一番見易い、聞こえ易いところに席を取って座っていたら、ちょうど重廣さんが通りかかったので挨拶をした。

14時30分開会で、開会セレモニーは水谷支部長。本部橋本会長、大阪府岳連小幡会長などの挨拶。そのあとは「ヒマラヤ今昔」と題して重廣恒夫さんの記念講演だ。氏の簡単な岳歴からヒマラヤとの触れ合いをイントロに、ヒマラヤ登山の歴史について、国際的な視点、日本の山岳界や日本山岳会の関わり合いなどについて語り、バブル崩



式典会場で重廣恒夫氏を囲んで

壞以来の日本人のヒマラヤ登山の衰退の実態等にも触れた。そうした中、日本山岳会創立120周年に向けて、グレートヒマラヤトラバース・プロジェクトなど新たなヒマラヤ挑戦の熱意などが語られた。

18時30分から懇親会で、東九州支部からの参加者9名は他支部会員との混同の席に散らばって着座だ。ここでも開会セレモニーの挨拶が続いたあと乾杯。宴が進む中、重廣恒夫さんが今年の秩父宮記念山岳賞受章者に選ばれたことの発表があり、出席各支部の紹介では東九州支部会員が「坊がつる賛歌」を合唱のために壇上近くに並んだら、北九州支部会員なども一緒に並んで大合唱となつて会場を盛り上げた。

記念山行

記念山行は箕面山歩きだ。当支部からは私と中野夫妻が参加した。10月27日(月)朝8時30分にバス2台に58名が分乗でホテル出発。9時20分に箕面大滝入口に到着。参加者が10~8



名の7班に分かれて出発で、先ずは滝の見物で谷まで降りて滝をバックに記念撮影。

その後引き返して、滝入口から山道を登り、箕面川のロックフィルダムを見ながら一山超えて下ると箕面ビターセンターで10時50分。ちょうどそこにいた重廣さんと一緒に記念写真。

そこから東海自然歩道歩きで、アップダウンしながら緩く登って行き、三つのピークを越えた鞍部でちょうど12時となり、ここでランチタイム。その後やや大きく登りついた所が開成皇子墓で、宮内庁管理地の墓には立ち入り禁止だ。その後少し先から自然歩道と別れて小さな山道を下ると勝尾寺の境内に降りついた。

真言宗のこの寺には、無数のダルマが寺中の至るところに置かれている。勝ダルマと呼ばれて縁

起を期待するためのものらしいが、一番小さなダルマでも2,000円だという。赤を基調にけばけばしく建てられお寺の風情や、山門手前の出入口は大きな土産品店の中を通らねばならない配置となっているところなどと共に、このお寺の商売気が生々しく感じられた。午後3時前、新大阪駅で流れ解散となった。

参加者…加藤、安東、阿南、飯田(勝)、中野(稔)、工藤、土屋、深草、中野(梨)

第38回宮崎ウェ斯顿際に 参加して

安東桂三(会員9193)

2025年11月3日(月)

場所：高千穂町五ヶ所高原三秀台

第38回宮崎ウェ斯顿祭が、開催された。このウェ斯顿祭は、日本近代登山の父であり、日本山岳会創立に関わったウォルター・ウェ斯顿氏の功績をたたえるとともに山岳遭難者を追悼し、山の安全を祈願することが趣旨である。三秀台とは、三つの秀でた山(祖母山、九重山、阿蘇山)を望めることから名がつけられた。この地は、ウェ斯顿氏が祖母山に登った際に通ったとされ、昭和41年に記念碑が建設され、昭和47年には洋鐘が取り付けられた。

日本山岳会宮崎支部が誕生した昭和60年に、第1回の宮崎ウェ斯顿祭が、高千穂町と宮崎支部の共催にて、開催された。新型コロナウィルス禍で3回ほど、中止になったので、本年は第38回となっている。

この祭は、ウェ斯顿祭、交流会、そして山岳会関係者のみによる懇親会の三つの行事が行われ、ウェ斯顿祭では、本会副会長の柏澄子氏が、来賓挨拶を述べた。柏副会長は、ウェ斯顿氏が日本山岳会創立に関わったことを述べ、その本会が創立120年となり、宮崎ウェ斯顿祭を今後も絶やさずに「引き継がれる山岳祭」として、山岳伝統文化を守ると述べました。宮崎支部長の日高研二氏の挨拶、また、宮崎支部会員により宮崎支部創立時の大谷優支部長の詩の朗読もあり、宮崎支部より、参加児童らに記念品が贈呈されました。

場所を五ヶ所野菜集出荷場広場に移動し、田原地区村おこし推進協議会主催の交流会が行われた。神事のあと神樂舞、アトラクションで楽しんだ。屋外なので気温低く、火を囲み、焼酎の闇歩酒がすすんだ。アトラクションを楽しみながら、柏副会長、当支部の加藤顧問、飯田顧問、阿南事務局

長、私で、今後の日本山岳会の在り方について、討論した。

交流会終了後、日本山岳会関係者は、公民館に移り、懇親会となった。柏副会長、宮崎支部13名、熊本支部4名、北九州支部2名、東九州は8名が参加。各支部からのスピーチがあり、話が一巡したあと、山の歌の歌合戦となり、いつもの「坊がつる讃歌」を皆で歌った。酔いが回り、いつの間にか、寝入ってしまった。

翌4日は、流れ解散となり、登山に行くもの、大分に帰るもの、それぞれが、来年の再開を誓つて別れた。柏副会長は、未登であった祖母山に登り、その記録は、11月17日の毎日新聞「わくわく山歩き」に“宮崎に残る偉人の足跡”として、掲載された。

参加者・・・東九州支部

加藤、安東、阿南、飯田(勝)、工藤、今川、土屋、清水(道)



日本山岳会創立120周年 記念式典及び記念晩餐会

下川智子(会員14505)

2025年12月6日(土)

日本山岳会創立120周年記念式典と記念晩餐会が新宿京王プラザホテルで開催された。全国から500名を超える会員と同伴者の出席、また国内外からの多数の来賓の方々や天皇陛下のご臨席のもと日本山岳会の節目の年を祝った。

13時からの記念講演会のあと、16時30分から記念式典が始まった。橋本しをり会長の挨拶のあと、物故者への黙とう、来賓挨拶がありそのあと橋本しをり会長による「日本山岳会120年の歩み」の紹介があり最後に「これからも山岳文化の継承と未来への取り組みを進めていきたい」と締めくくった。新永年会員26名の顕彰のあと、秩父宮記念山岳賞受賞者の挨拶があり、「日本山岳会のヒマラヤ登山への貢献およびヒマラヤについての普及」で受賞した重廣恒夫会員と「インド、ヒマラヤの研究と書籍の編集、出版」で受

賞した沖允人会員が挨拶した。

最後に新入会員紹介があった。正会員212名、準会員36名が入会、そのうちの44名が出席して登壇、会場から暖かい拍手が送られ式典が終了した。

式典会場からコンコードホールルームに移動して17時30分から晩餐会が始まった。

東京支部のバレンタインまさ子会員による司会で、まずは橋本しをり会長挨拶。「120周年節目の晩餐会に天皇陛下のご臨席を賜りお礼申し上げます。国内外のご来賓のご臨席に国際的な広がりが本会の財産であることを実感している。」との挨拶のとおり海外からの来賓の多さに驚く。友好登山団体としてカナダ、パキスタン、韓国、中国、台湾、エクアドル、モンゴル、ネパールから山岳会会長や山岳関係者が、またアジア山岳連盟会長も臨席されていた。

会長挨拶に続き、来賓挨拶が駐日英国大使ジュリア・ロングボトム氏からあった。「日本と英国は登山の歴史において特別な繋がりがある。ウォルター・ウェ斯顿師は日本近代登山の父と称されている。」昨年の天皇皇后の英国訪問の際のエピソードなどを挟みながら、「山は私たちに、自然への敬意、人とのつながり、困難に立ち向かう強さを教えてくれる。幅広い分野で日英両国の協力が深まることを期待している」と流ちょうな日本語と英語で挨拶された。次に恒例の鏡開きが天皇陛下や駐日英国大使も参加されて行われた。乾杯のあと、会食、歓談が始まった。会食中、江戸獅子舞やバレンタインまさ子会員の日本舞踊なども披露され宴を盛り上げた。続いて海外来賓紹介があり、各国からの来賓の方々が登壇、写真撮影、次に支部会員紹介などがあり20時30分に東京支部会員たちによる木遣りで中締めとなる。中締めのあと天皇陛下が退席され、その後はテー



壇上で坊がつる讃歌を歌う支部会員たち



ブルを行き交いながら和やかに懇談が続いた。
120周年記念に相応しい華やかで素晴らしい晩
餐会だった。

参加者・・・安東、加藤、江藤、飯田（勝）、阿
南、佐藤（壯）、下川、工藤、今川（美）、土屋、深
草、上野

『日本山岳会創立120周年記念式 典 国際友好山岳会来賓 歓迎会』 安東桂三（会員9193）

年次晩餐会の前日（12/5）、京王プラザホテルにて、JACの国際プロジェクトの企画として上記の歓迎会が開催された。これは日本山岳会の創立120周年記念式典に、世界中よりお越しただいた山岳会の皆さまを歓迎するパーティであった。

9月に当会の橋本会長が韓国を訪問し、CAC創立80周年記念式典に参加することとなり、橋本会長から、東九州支部と韓国山岳会（蔚山支部）との友好関係についての問い合わせがあった。私より過去の交流登山のデータの送信や、説明を行っていた。それで、当会の創立120周年記念式典にアジア山岳連盟や韓国山岳会の会長らが参加されるので、この歓迎会に出席するようにとのことであった。

晩餐会の前日19時より、京王プラザホテル44階アンサンブルにて開催。カナダ山岳会、パキスタン山岳協会、韓国山岳会、中国山岳協会、中華登山協会、中華台北健行登山会、エクアドル山岳連盟、大韓山岳連盟、モンゴル山岳会、ネパール山岳協会、アジア山岳連盟らの代表や、メンバーらが集まった。

最初に当会の橋本会長が歓迎の挨拶を行った。日本山岳会の創立時からどのように120周年に至ったかを説明し、「日本山岳会は、世界の山を愛する仲間たちとの友情をいっそう深め、自然を敬い、山と人との調和を大切にするという共通の価値を分かちあっていきたいと願っている。本日の式典が、皆様の相互理解と連帯をさらに強める意義ある機会となることを願っている。」と歓迎の言葉を英語でスピーチした。

招待者であるアジア山岳連盟（UAAA）会長のLee In Jung氏（日本山岳会の会員でもある）が、JAC120周年の御祝いを韓国語にてスピーチを行った。そのスピーチの中に、Without mountains, there is no future.と述べられ、山がなければ未来はない、まったくその通りだと同感であった。

カナダ山岳会＆国際山岳連盟（UIAA）元会長Michael Mortimer氏の挨拶、記念講演のJochen Hemmleb氏の挨拶のあと、JAC元会長の小林政志氏、JAC前会長の古野淳氏による乾杯

の発声で宴が始まった。宴には、チャールズ英国王のスピーチビデオが上映され、ウェストン氏とJACの関係が述べられた。JAC名誉会員で、HC元会長であるH.カパデア氏のメッセージビデオの上映の後、JAC&AC名誉会員の中村保氏の名誉会員報告があった。

宴の最中には、私は韓国山岳会のCho Dong Sik氏、Byon Gi Tea会長、大韓山岳連盟Cho Jwajin会長ら、7名の方と過去の韓国山岳会蔚山支部と当支部の交流について、英語、日本語、韓国語を交えて、お話をし、当支部の創立50周年記念誌、60周年記念誌をそれぞれ2冊づつ差し上げた。

最後に、仲締めの挨拶を当会々員であり、UIAA顧問の神崎忠男氏が、三本締めを行った。仲締めに当たり、神崎氏は、日中、中台、中韓、日韓の関係について仲良くしようと、中国、台湾、韓国の参加者を壇上に呼び上げ、多くのメンバーで締められた。まさに未来を、良い未来にしようとの考えだった。

（海外からの参加者31名、日本山岳会関係者76名）

個人投稿

ペンリレー・第55回

「一步一步、縁に導かれて」

河野 達也(会員16600)

私の山の原点は、40年以上前に遡ります。当時、登山家・植村直己さんに憧れて高校の登山部に入部した私は、初めてのテント泊を「坊がつる」で経験しました。しかし、私と坊がつるの心の繋がりはさらに幼い頃、小学生の時に「坊がつる讃歌」を好きになった時にまで遡ります。あの頃に抱いた山への憧憬が、私を山へと導いてくれたのかもしれません。

高校卒業後はしばらく山から足が遠のいていましたが、そんな私を再び山の世界へと引き戻したのは、「縁」の重なりであったように思います。

平成23年頃、登山をしない職場の上司に連れられ、大分市都町の飲食店「重箱」を訪りました。そこは、日本山岳会東九州支部の梅木秀徳前々支部長や加藤英彦前支部長が折に触れて出入りされていた場所でした。そこで梅木さんを紹介された時の感激は、今も忘れられません。「坊がつる讃歌」の誕生に深く関わった憧れの方と握手を交わした際の手の温もりは、今も鮮明に覚えています。

その後、梅木さんは帰らぬ人となりましたが、梅木さんを偲ぶ会が「重箱」で開かれた際に、山は登らないものの「坊がつる讃歌」をこよなく愛する別の上司が、持ち前のバイタリティで飛び込んだのです。そこで上司は加藤前支部長と意気投合し、「坊がつるへ行こう」という約束を交わしました。その計画に登山経験者として半ば強引に私が誘われたことが、日本山岳会東九州支部へと繋がる転換点となりました。周囲の人々の豊かな好奇心が、私を再び山の世界へと連れ戻してくれたのです。

平成26年9月27日、加藤前支部長や重箱の皆様、職場の上司と共に、1泊2日の坊がつる山行が実現しました。初日は法華院温泉山荘に宿泊しましたが、折しもこの日は御嶽山が噴火した日でした。夕食時にテレビから流れる噴火の映像を、複雑な思いで見つめていたことを覚えています。翌日は快晴の下、大船山に登頂しました。かつて歩いたこの場所に再び立つことができた感動は、ひとしおでした。

この出会いを機に、私の山歩きは再び大きく動き出しました。日本山岳会入会後は、会友から準会員、そして正会員へと歩みを進めることができました。特に準会員の際には、幸運にも「AOOO1番」という第一号の番号をいただき、その年の年次晚餐会では新入会員代表として挨拶をさせていただくという、身に余る光栄に浴しました。先輩方のご指導のおかげで、念願だった槍ヶ岳や剣岳への登頂も果たすことができ、「あらゆる縁がつながって今がある」のだと実感しています。

また、私自身の大きな節目となったのが「大分百山」の完登です。新型コロナウイルスの影が忍び寄り始めた令和2年2月29日、無事に全山を登り終えることができました。登山をしなければ決して足を踏み入れなかったであろう場所を巡る中で、これまで自分の中で「点」でしかなかった大分県内の各地が、豊かな「線」として繋がっていく喜びを味わいました。各地の素晴らしい温泉や食文化を知ることができたことも、私にとってかけがえのない財産になりました。

現在は、偉大な先輩方の背中を追いかける日々です。大分の豊かな自然の中で、これからも一歩ずつ精進を重ね、山を楽しんでいたいと考えています。

※ペンリレー・次回は 渡辺金治さん(16613)へお願いしました。お楽しみに。



平成26年9月28日 大船山山頂にて

追悼文 日本山岳会 東九州支部 元事務局長

西孝子さん(会員番号 8325・1932~2025)を偲んで

加藤英彦(8765)

元事務局長西孝子(8325)さんが誤嚥性肺炎のため2025年10月14日に亡くなりました。享年93歳でした。

1996年、64歳の時ネパール・コンデ山を登頂しその功績で大分合同新聞社賞を翌年受賞。葬儀は17日、会葬者のお礼に配る「人而無心」には喪主のあずささんが一晩考えたという次の文章が添えられていました。

「エベレストは笑っていますか」 一ヒマラヤの風になった母へ
山を愛した母でした。ヒマラヤを愛した母でした。今頃はサガルマータの
まわりをチョロチョロしながら「アマダラムはかっこいいね」「こっちの山
にも登りたかったな」とつぶやいているでしょうか・・・中略・・・

さあ母を連れてどこかへ行きましょうか。2025年10月14日、母孝子の魂はヒマラヤの空へ飛んでいきました!!

西孝子さんと山との因縁はいつ頃から始まったのかを振り返ると、それは夫であった西諒さんとの関係からさかのぼらなければならない。西諒さんが中津から大分へ出て来て小さな山道具屋は始めたのが昭和30年頃であった。その後店を府内町に移転して「サニー山の店」と名付けて、店は順調に推移していった。

日本山岳会東九州支部は昭和35年に誕生し以降ずっと事務局をサニー山の店内に置いていた。一方孝子さんは教員を20年勤めている。あるわけありの理由で諒さんが店を捨て孝子さんの元を去ってから、山の道具屋を引き継いで店を営業しながら山へのめり込んでいった感じである。

そのあたりから山登りに本格的に向きあい、山岳会の事務局という仕事をしながら、一方登山活動に精を出すようになった。ヒマラヤ通いは50代になってから80代の初めまで約30年続けている。

西さんに誘われてトレッキングに同行した山仲間も数多くいる。時には店の前を通りかかった人に声をかけ、その人をネパールに本当に連れて行ったという逸話も残っている。

日本山岳会の行事、晚餐会や全国支部懇などに積極的に顔を出し名物事務局長として知れ渡ったのは、今西錦司先生に重宝がられ、又重廣恒夫さんとは西穂高山荘での「あずさ」、「穂高」のエピソードが語り草となって交流が続いたからであろう。

一方今西錦司先生の提唱した十二支会(その年の干支の山に登る会)にも傾倒していき昭和58年から平成31年迄の36年間毎年その山行に参加している。頂上では必ず万歳をする。それも今西錦司先生のやり方だ。両手でストックを持ち頂上の三角点に土をかけるように、天に向かって突き上げる。あまりにも好き勝手な言動をするあまりに西さんから離れて行った人もみうけられ、すきなように生き、すきなように振るまって過ごした一生であったが、西さんは本当の事を言い、決して間違った事を言った訳ではなかったのである。それが西さんの流儀であった。

炊事、洗濯、掃除といった女性特有の仕事は苦手で、それらをやっているのをみた事がないようだった。いつもはなさなかったオロナミンCだけでは栄養はいきわたらなかったのではないかだろうか。晩年は店を閉じ老化をあまんじて受けとめ、それでも生命力は保ちながら張りつめた緊張感が解きはなれたように、認知が進んでいき、介護の世界にお世話になっていった。最後は、巨木が倒れるか如く逝ってしまった。

西孝子さん色々とお世話になりました。“安らかにお眠り下さい”



個人山行
懐かしい金剛山に
土屋多喜子(会員 15827)

2025年10月27日(月)

大阪府と奈良県に跨る金剛山。標高1125m、多くの登山道を持ち日本2百名山に選ばれている。60数年前、3年間大阪に居た私はこの山に何回か登った。当時の登山道は道幅が狭く、難所は無かったが、頂上迄の道のりは長かった。大阪から登り、奈良に下りた事も。杉林の雪景色の忘れ難

い美しさ、登山口の千早赤阪村に楠木正成の遺跡を巡り、太平記に熱中したり、金剛山は私の忘れ難い山になっていた。

金剛山ロークウェイ、回数登山、頂上ライブカメラ等のニュースを聞くと、もう一度あの山里を訪ねて登ってみたいなーと思っていた。今回、山岳会関西支部の記念大会に出席の翌日、4人で念願の金剛山に登った。思い出の景色との遭遇にワクワクの山行となった。南海電車、バスを乗り継ぎ、終点の伏見峠口で下車。頂上まで、3.8キロ、2時間強の伏見林道コースを撰ぶ。舗装された上り坂が延々と続くコースで、伏見峠が近くになると勾配も急になり、念佛坂との異名のこの坂、念佛は唱えなかったが喘ぎながら登った。登山開始から1時間経過。そこから頂上までも舗装された上り坂は続き、分岐を幾つか過ぎると山頂歩きとなる。山地を整備してのキャンプ場、芝生の広い、ちはや園地等が広がる。ちはや園地には、遊具、星と自然のミュージアム、宿泊施設等見られる。ロープウェーは老朽化して撤去され今は無い。金剛山頂は奈良県なので、大阪府の最高地点1053mの標示板の前も過ぎ、やっと大きな木製の一の鳥居が目の前に。この鳥居をくぐり葛木神社の神域に入る。山頂は神社のすぐ裏にあるが、特別な神域のため、そこには立てない。

神社の歴史は飛鳥時代にさかのぼり、役行者の創建とされ、厳かな佇まいである。真っ直ぐ伸びた杉林に太陽が射し光の帯を作ったり、並び立つ石灯籠と長い石段に急に霧がかかったり、60年前の思い出の景色と今日見る景色が全く同じなのに思わず息を呑む。

樹齢500年の仁王杉、並び立つ夫婦杉の前を通り二の鳥居を抜けると神域を出て、転法輪寺前の広場に出る。残念ながら時間が無く広場には行



一の鳥居

けなかったが、そこには、多くの回数登山者の名が並び、なかには1万回を超える人もあるらしい。頂上カメラ、売店もあり、大阪の街も望める賑わう場所の様だ。60年前の記憶では、転法輪寺は宿坊もある大きな寺であった。2020年に、日本山岳遺産に選ばれている。

下りのコースはどうしようかと4人で相談している時、通りかかった女性に相談すると自分も今から下りるので一緒に下りましょうと言って貢え、寺谷ルートを下りる。この寺谷ルート、細い沢に沿い山の中を抜ける。木の根、ゴロゴロとした石、狭く古い木の階段が多く、前日の雨で滑りやすくなっている、ゆっくり慎重に下りる。沢の水音を聞きながら、木々に近々と触れる下り道、水場で休みなどして1時間で伏見口に着く。



葛木神社

60年前とは違う道を登り下りし、又、違う金剛山に出会う事が出来た。千早赤坂村は未だに大阪府唯一の村の名を残していて、楠木正成もきっとそのほうがゆっくり出来るだろう等様々を思いながら車に揺られ山里を後にした。

参加者・・加藤、深草、工藤、土屋



こぎこぎ倶楽部

生木峠と大峠の探索

飯田勝之(会員10912)

2025年11月23日(日)

古い峠道探索シリーズの今回は宇目町の生木峠と大峠だ。この峠道は、豊後岡藩(竹田)が領地内の小野市村の管理支配と、藩の重要な資源である

木浦鉱山の物資を竹田へ運搬する大切な道でもあったのだ。

11月23日(日)午前7時前、小野市に集合したのは10名。7台の車を4台に絞って、2台を御泊にデポ後、木浦小学校跡の校庭に移動。校庭横から御泊へ通じる車道を入ると、その奥のカーブに車道から分岐する道が三つある。まず一番手前の道に入るが方向違いと分かり、次に三番の道に入るがやがて行き止まりとなり、真ん中の道に入って行くと、どうやらこれが古い峠道らしいと判明。

荒れた植林地の中の道は、無数の倒木や崩壊でかなり荒れていますが、わずかに昔の道の名残を留めています。

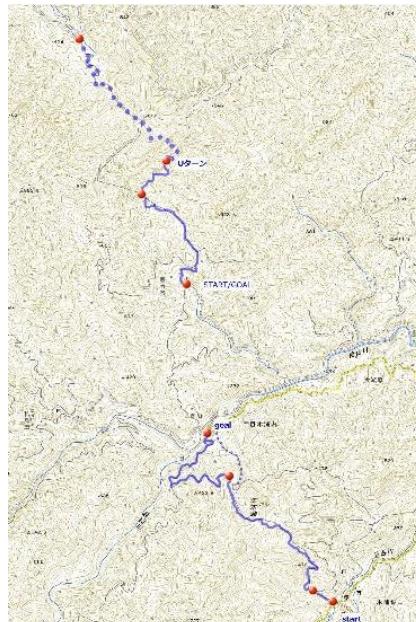
傾斜もありかなりハードな登りだ。一時間余り登ったら前方に杉の幼木林の谷間が開け、際にはシカ避けのネットが張られている。そのネットに沿って猛烈な力ヤをかき分けて前進だ。下方には御泊へ通じる車道が見える。やがて道はネットの向こうの、幼木林の中を行くようになる。ネットの下を匍匐前進。幼木林の中は背の高い猛烈な力ヤのブッシュで、こぎ分け踏み分け、無数の倒木に足元を脅かされながらの前進。先頭の中野さん井村さんご苦労様。途中で二度、シカ避けネットで遮られて、下を潜ったり跨いだりしながらの前進で、猛烈な力ヤのヤブこぎが続く。

そして、ようやく自然林の小尾根に達し、やっと一息入れて休憩。ここ迄1時間50分を要している。少し行くといきなりコンクリート舗装の作業道に出た。造林作業道らしい道で、しばしばブッシュから解放された気分で登る。その終点から稜線を辿り、最後のシカ避けネットを潜り抜けるとほどなく目的の生木峠に着いた。入口から約3時

間を要している。半ば潰れた峠の掘り割りである。ここで記念写真を撮って小休止。

峠からの下り道は、荒れてはいるが、かなりしつかりした道の名残があり、その道は曲がりくねった溝となっているので、横の岸の部分を歩くようにして下って行くが、登りに比べて楽にどんどん下ることができた。そして、30分ほどで木浦に通じる車道に出た。御泊までの下り道はまだ半分だが、そこから下の道は殆ど不鮮明の谷間の道のようなので、後の時間を考えて舗装の林道を下ることにした。約1.5km、25分余り下ると車をデポした三差路の広場に着き、西山公民館の裏手の、田園の岸に並んで腰かけて、丁度12時のチャイムを聞きながら、温かな日射しを背に弁当を開いた。

12時30分、大峠めざして車で悪所内へ移動。大峠道は昭和28年調査作成の地図と最新の地図



で道が違うが、古い道の踏査が目的の俱楽部だ。集落入口三叉路に駐車して出発。すぐ上の熊野神社に立ち寄るが、鳥居の奥は全く手入れされてなく、社殿は力ヤのヤブの中だ。コンクリートの簡易舗装の林道をどんどん登って行く。右手上に見える尖峰は砂連塚だ。その砂連塚への道を右に分けて登って行く。しかし私はもうかなり疲れた気持だ。13時10分。簡易舗装の道も終わり、直角に左に曲がる道は茅の道。「もうこの辺で」



は私の内心。疲れているのだが、中野、井村が意欲的に登って行くのを恨めしげについていく。15分ほどで分岐があり、右に行くのがどうやら古い地図にある道のようだ。荒れた岩礫の道を登り、ほぼ水平のトラバース道が小稜線を二つ横切って照葉樹の林の中に続いている。その道がやがて谷に向かって下り始める所で時刻は午後二時だ。ここから先は次回の宿題として、やっと今日の踏査はこれで終了となった。帰りも荒れた道の長い下りだ。14時50分悪所内到着。後は木浦にデボの車を回収後、小野市で解散した。皆さん「今日は楽しかった」と元気が良い。

参加者・・・飯田(勝)、中野(稔)、櫻井、平原(健)、清水(久)、古谷(耕)、平原(瑞)、飛高、井村

こぎこぎ倶楽部 佐賀県の天測点と子午線 標を探して

清水久美子 (会友 178)

2025年12月21日(日)

本日のこぎこぎクラブの山行は、情報が少ない佐賀県にある天測点と子午線標を見つけに行くのが目的です。天測点は一等三角点が目印になるので割と探しやすいですが、天測点の対になる子午線標は天測点からみて真北か真南にあるということくらいしか情報がなく、探すのがなかなか大変なのです。時間がかかることを予想して大分を朝早く出発することに。午前5時、集合場所の別府湾SAを出発時には雨がパラついていましたが、天気予報では徐々に良くなるとの事。

まずは場所がはっきりしている天測点のある梨川内一等三角点を目指すことに。目的地付近に到着し、三角点のある山に取り付きやすい場所を探しながら歩きます。すぐに取り付けそうな場所を見つけ、三角点を目指してグングン登って行くと程なくして上から「あったよー」の声。声の方に登って行くと三角点と九州では珍しい四角柱の天測点がありました。(九州で私が見た天測点はすべて八角柱であった)まずは第一目的を達成。ほとんどヤブ漕ぎもすることなく、見つけられて少しホッとしました。

次に子午線標を探しに行くことに。天測点から

真南か真北に子午線標があるのですが、今回はSさんが得た情報では真北の方向にあるとのこと。地図上で見て、真北の線上の子午線標を設置していそうな場所を4ヶ所に絞り、まずは一番遠い、天側点から4.5kmの所から踏査することにしました。

地図上では車道は途中までのようにだったので、駐車できそうなスペースに車を止めて、目的地まで歩くことに。最初地図を見ながら歩いた場所は途中から藪がすごすぎて進めそうにないので、一旦引き返し道を模索することに。ちょうど地元の方にお会いして道を尋ねるも子午線標の場所など



梨川内の子午線標を囲んで

は分からぬこと。とりあえず藪がない道を教えていただいたので、その道を歩いて目標としている場所を目指すことにしました。途中から作業道を少し歩き林の中に踏み込んで目的にしていた山に取り付けます。

先行していたメンバーから「見つけたよー」の声。声のする方に登って行くとありました、探していた子午線標が、何と、1ヶ所目で見つかったという幸運です。まるで宝物を見つけたみたいですごく気分が高揚しました。それにしてもほとんど情報がない中で設置場所を予測するリーダーとSさん、凄すぎです。

子午線標が予想以上に早く見つけられたので、帰り道の途中にある八幡岳と女岳に登ることになりました。八幡岳は山頂直下まで車で行けますので、駐車場から歩いて10分弱、パパっと歩いて山頂で昼食を取るために。遠くに唐津湾を眺めながら昼食後はその隣にある女岳(船山)へ。女岳との鞍部にある八幡岳キャンプ場横の登山口から登ります。九州自然歩道なだけあって登山道は整備されていましたが、思ったよりもアップダウンがあって意外と歩きがいがありました。

最初に登り着いた所は、685mで三角点がありましたが、そこは登山道からそれたヤブの中で、ほとんど誰も登っていないようです。そこから少し下って登った所の山頂手前に剖石(われいし)神社と書かれた立派な祠もあり、昔信仰の対象の山だったことが伺えます。そこからもう一登りしてから695mの女山の山頂へ。周囲が木々の間からところどころ確認できるくらいには眺めが良かったです。子午線標探しに加え、なかなか足を運ぶことのない佐賀県の山に登れて大変充実した1日になりました。



参加者：飯田(勝)、中野(稔)、佐藤(裕)、清水(道)、清水(久)、井村

同好会女子部

皿山和子(会友270)

2025年10月4日(土) 曇り

記念すべき東九州支部女子部設立第1回由布岳山行が開催されました。まだ登山経験の浅いわたしにとって、由布岳はずっと登ってみたいとあこがれていた山です。しかし、登山を始めた年に4件の滑落事故があり、ずっと敬遠してきた山でもあります。これから女子部で由布岳登山を行うということで一念発起して参加することにしました。当日は由布岳南登山口集合。6時半到着を目指して家を出たのですが、途中から違う方向に行ってしまい、やっとたどり着いたときには出発時刻の7時10分を過ぎていました。申し訳なさでいっぱいでしたが、みなさんがあたたかく迎えてくださり、ホッとしたのと同時に今回女子部の方々と登れることをうれしく思いました。前日の雨も朝には止んで、暑くもなく登山に丁度いいぐらいの

天気になりました。自己紹介後、体操をしていざ出発。「おしゃべりしながら歩ける速さ」ということで、ゆっくり登っていました。由布岳のこと、登山の体験、近況、身の上話まで、いたる所でおしゃべりと笑い声が響き渡り、楽しい登山になりました。しばらく草原の中を歩くと樹林帯に入り、50分程で合野越に到着。休憩していると鹿の親子を発見し、歓声が上がりました。その後、栗やドングリが落ちている森林の中へ。ジグザグに歩いていると、時々ひらけたところできれいな下界の景色が見えました。さらに進むと、左右にカヤが生い茂った道に変化し、だんだん岩が増えてよじ登る感じに。必死に登っていると、いつの間にか周りはガスで覆われていました。疲れもピークに達したころ、マタエに到着。周りはガスに覆われ、風に吹き飛ばされそうでした。東峰の山頂まで行くかどうか迷いましたが、山頂もガスで見えなかったので次回行くことにしました。昼食後、時間もあるので飯盛ヶ城にも行ってみることになりました。合野越から右に分かれ、森林帯を抜けると草原の急登へ。15分ほど頑張って登ると全方位の素晴らしい景色が見えました。大きく深呼吸するととても気持ちよかったです。その後、無事下山しました。登山中、以前足がつったことを話すと「クエン酸がいい」とその場で分けてくださいました。装备について教えてくださったりと、とても勉強になりました。本当にありがとうございました。今回はマタエまででしたが、自分としてはとても達成感のある登山になりました。皆様、楽しい1日をありがとうございました。次回は、頂上を目指して頑張りたいです。参加者…笠井CL、井村SL、今川、神田、河村、大前、佐藤美、興梠、山田、皿山、図師、土谷、古山 計13名

私の無名山ガイドブック No.99

九重野(63.1m)・菅/谷(517.7m)・
中ヒエ(422.4m)
飯田勝之(会員10912)

九重野

大野川の源流の大谷川が熊本県との県境をなす深い渓谷を造る、その直ぐ東に南北にやや長く連なる稜線の、大分県側の北の端近くにある。

音無井路の円形分水から少し西に上がったところに百木集落の最奥の民家があり、その前を通って百木から県境に向かって西に入る林道がある。この林道は民家から200mほどで舗装が切れて荒れているから、ここから登る。緩い登り道が稜線の南側斜面を縫うように続き、民家から約30分、1.3kmほどで稜線を横切る小さな掘り割りがあり、その先は稜線北側斜面へと緩く下り始める。そこから左(南)の稜線にとりつき、ヒノキ林と灌木林の境の稜線を上れば、10分の登りで小ピークにつく。4等三角点(九重野)はピークからやや東によった、北東向き斜面にある。

参考タイム: 百木最奥の民家→30分→稜線とりつき→10分→三角点



管の谷

瀬ノ口川と緩木川に挟まれた台地状の山稜は度を上げて県境のムレ山へと続くが、その稜線の最初の高まりの個所である。

県道竹田五ヶ瀬線の田原の集落の東端近くの、県道の北側にある田原公民館とその奥の神社が登り口により。神社の横から古い山道を登れば、5分ほどで最奥の民家の横に出て、小さな車道となる。この道を登れば、直ぐ上の掘り割りの先がT字路で、ここを左に登っていく。右手はなだらかに上へと続いている。T字路から15分ほどで棚田の上の道路終点に至る。ここよりヒノキの植林地の小稜線にとりついて登れば、道路から3分足らずで小稜線上の小さな鞍部の稜線で、緩く登ると数分で山頂に達する。4等三角点(管の谷)は手前の鞍部から3mほど南に下がった緩斜面にある。

参考タイム: 田原公民館→10分→T字路→20分→三角点

中ヒ工

大野川と緒方川に挟まれた、上流部の狭い丘陵地はいったん400mまで高度を下げて、この三

角点のある地点まで盛り上がったあと、急に高度を下げて300m台となっていく。三角点のある地点は丘陵地の南、緒方川に近く、川から急斜面でせり上がったところの台地のへりにあたる。

河原立のバス停から南に橋を渡り、南に進むと約1.7kmで左(南)に鋭角に入る林道があり、入口に「宮砥竹田線5号」の巡視路標識がある。これに入り約10分(500m余)で二股を左にとり、更に5分(300m)で右の瘦せ尾根の上に鉄塔が見え、「宮砥竹田線5号」の標識がある。これを上り、鉄塔の奥へ進むと大きなサクラの古木の横に三角点がある。鉄塔入り口から40m先の、「宮砥竹田線6号」巡視路への分岐の手前から、引き返し気味に南の小稜を登ると、最高地点で、そのちょっと先に4等三角点(中ヒ工)がある。

参考タイム: 林道入口→10分→分岐→5分→鉄塔下→2分→三角点



JAC古典「山岳」拾い読み No.10

九州の山々(その1)

飯田勝之(会員10912)

山岳(第十三年(大正八年)・第三号 九州の山々(その1)(工学博士八代準)

「題して九州の山々と云ふ、けれどもたくさんの山に登っているわけではない。明治四十四、五年



山岳13号の表紙

の頃大小僅か二十座程に登ったのであって話は古い」で始まる、いわば山の紀行文集で、交通機関のまだ未熟で、もちろんマイカーなどない明治の時代、博士は毎回鉄道駅からの長い道路を辿って登っている、その記録であるが、今回は多良岳と天山、背振山と虚空蔵山に登った山行記を紹介しよう。

多良岳

明治四十年五月二日、午前七時半に松原驛に下車し、鉢巻山や郡岳の南麓を通って北ノ川内から黒木を経て多良岳への道を登り、雨のため経ヶ岳をあきらめて金泉寺に投宿している。

そして翌日も雨のため多良嶽神社だけ登って、五家原岳直下の佛ノ辻から下ったが、途中で道を外れて猿崎まで下り、丁度来た馬車に便乗して諫早駅へと帰っている。黒木から佛ノ辻までの山道とは別に、里の道路部分だけでも30km以上の歩きである。

その中の金泉寺の部分だけ・・「一夜の宿を頼んで内に入り、爐を囲んでいろいろ話を聞いた」・・

「寝る段になると貸してくれた布團は只一枚で、然も葬式の時に死人に掛けたものらしく、白地に南無阿彌陀佛と筆太で書いてある・・・藁蓆一枚敷て此布團を引かぶり、屋根の穴から空を見ながら寝る・」一晩中ネズミが暴れまわってまんじりともせずの一晩の様子などが書かれている。

天山・背振山

明治四十四年五月六日、午前十時に小城駅に下車。出分、寒気、本山の観音様、川内と経て、記載がないから多分上宮を経ないで、道のない草原の斜面を登って・・天山の三角點についたのは午後1時半である」とある。午後二時に山頂を出發して、真東に向かって尾根を伝い、天山の雰囲気を楽しみながら東北に向かって市川の方へと下っている。今の道とはかなり違う道のようだが、市川からは道路歩きで菖木を経て湯原温泉に投宿している。

翌日は朝5時に宿を出て、鳥羽院、腹巻、龍作、久保山等と長い道路を経て背振神社に至っている。ここからは山路を手入れする村人たちと一緒に登っている。「道は甚だ立派なもので、極めて楽である・・日本山岳志を見ると「此山は中古より只管佛となれり」とあるが「尾根に達して北に頂上に向ふ邊には、所々石に刻んだ佛像が残っている・・・」とある。十時に頂上に達し、下山は登路の途中から東の板屋(那珂川方面)に下り、小川内、七曲峠、古田原、峻部を経て午後三時半に中原の駅に着いている。小城駅から川内まで約9km、市川から湯原まで6km、湯原から背振神社まで20km、板屋から中原駅まで19km、考えただけでも気が遠くなるほど長い里の道路歩きである。

虚空蔵山

汽車が長崎線の川棚駅に近づく頃より、マッターホルンに似た一奇峰を望むことが出来る・・で始まる。明治四十四年五月廿八日、川棚駅に下車。大村湾の展望を得ながら登る為に岩立の溜池から真東の高見岳の尾根を高見岳まで登り、真北に虚空蔵山に向かう。「此邊は草山で何處でも通過できる・・・馬を馬子が銜え煙管で通って行く等、長閑なる春の山である」が虚空蔵山との鞍部から「雜木林の繁茂した中に没して通過困難になってきた・・・蜘蛛の巣に無暗と引っかかるのでやりきれない・・ついに降参して引き返し、小徑を下って西に右折し更に東北に小徑を登って尾根の上に出て・・・虚空蔵に突進した所マッターホルンの尖頭岩の直下に突當った。絶壁でどう見ても登れない。右に左に岩を廻る工夫をしたがどうしても行けない。東の方へ迂回してみたが登り口は見当たらずとうとう長野に下りてしまった。百姓家で弁当を食べながら聞くとやはり最初の所あたりから登り口があるとのことだ時間がないので、牛ヶ岳、鬼木、井石、波佐見を経て有田に出て汽車で帰った。とある。

より安全な登山のために No.60 『てっぺんの向こうに あなたがいる』

安東桂三(会員 9193)

この秋『てっぺんの向こうにあなたがいる』の映画が上映された。この映画は登山家の田部井淳子さんの生き様の物語である。田部井さんは、2016年10月20日腹膜癌のために逝去された。私は田部井さんとは何度もお山をご一緒したことがあり、たぶん大分県では一番か二番に、田部井さんと懇意ではなかったかと思う。

最初にお会いしたのはたぶん1981年だったと思う。田部井さんが中国チベットのシシャパンマに登頂して、そのシシャパンマ情報、チベットの状況などを故伊東亨さんが尋ねるために別府温泉に招待しての席だった。当時大分県山岳連盟は、チベットの未踏峰「ポーロンリ」に遠征隊を送る準備をしていた。そのポーロンリの隣の山がシシャパンマだった。それが縁で登山家の田部井さんの生き様を知ることになった。

また数年後大分で田部井さんが講演されるときに、祖母山に登りたいとのことで、案内をしたこともある。この時は神原から登り、祖母山頂、黒金山尾根を下り、尾平の宿泊施設（現在は、ランプの宿）に宿泊した。

晩年田部井さんは、毎年1月始めに別府の鉄輪温泉に湯治に行くのを行事としていた。常宿もあり、ゆっくりと過ごすのが年始の行事だった。今年はどこどこに行きたいとか、この山に登りたいとリクエストがあり、御供をしていた。2015年はすでに癌を患っていたが、鶴見岳に登りたいと言われ、ロープウェイで山頂駅まで登り、そこから鶴見岳山頂を往復するつもりでいたが、山頂に着くと、歩いて下りたいと切符をキャンセルして、一気登山道を下山した。

2016年は法華院温泉山荘に泊まりたいと、吉部から登山をした。ゆっくりしか歩けない淳子さんを、ご主人の政伸さんがストックで引っ張るようなこともあり、映画の一場面と同じだった。雪の法華院温泉山荘では、宿泊者は我々以外に1名しかおらず、その登山者も加わって、皆で美味しいお酒を飲んだ。永遠に田部井さんは生き続けると感じていたが、その年の10月に天国へ旅立ってしまった。

この『てっぺんの向こうにあなたがいる』の映画の原案本は、潮出版社の『人生、山あり“時々”谷あり』で、その中で田部井淳子さんは、多発する中高年世代の遭難事故について2つの原因を述べている。その一つは「無理をしてしまう」で、悪天候なのに連休の限られた日程しか組めないのに、とかの原因を述べている。そして「せっかく来たのだから」と無理をして、命を落としたら何にもならない。生きていればまたいつでも来られるのだから、引き返す勇気は大切だと述べている。

もう一つの原因是「自己過信」だと述べている。自分の老いや体力の衰えを認めず、若い時と同じような登山は出来ないのは当たり前。疲労回復に時間がかかるし、膝のバネも衰え、踏ん張りも効かない。バランスも悪くなり、無理は禁物と述べている。でも高齢になっても、準備を怠らなければ登山は可能とまとめました。

この中高年世代について、長野県では記録的な山岳遭難数となっている。今年の1月に長野県警は2024年の統計を報告し、「山岳遭難が過去

最多更新 中高年の遭難目立つ」と、体力や準備不足による遭難が増加と注意を呼びかけた。

この後ゴールデンウィーク明けの5月10日には、春の大型連休中の山岳遭難が過去10年間の最多を更新と報告され、夏山前の7月5日には過去最多の2024年を上回るペースと発表され、8月7日にも長野県の山岳遭難、過去最悪ペースで経験少ない60歳前後にリスクと報告、10月7日には山岳遭難数が過去最多だった昨年を超えたとなった。

そして11月になって「他人事ではない」長野の山岳遭難が過去最多と、救助活動の様子を動画（YouTube）に公開した。北アルプスの遭難は半数が60歳代以上だとなっている。

当支部を構成する会員の平均年齢は、はるかに60歳を超え、たぶん70~71歳と思う。この私も現在69歳。日本山岳会全体では平均年齢は当支部より少し高いと思う。田部井淳子さんの「準備を怠らない」を常に。



お知らせコーナー

図書の紹介

「大分県の三角点」を出版

中野 稔（会員 13997）

このたび飯田勝之会員（10912・東九州支部顧問）が「大分県の三角点」（B5版・303ページ）を自費出版しました。大分県内にある1等から4等までの三角点・2,420余りのすべての個所を、平成20年から令和2年までの足かけ13年にわたって、ほぼ全地点踏査し終えた筆者が、そのうちの1等、2等、3等の全724個所の踏査記録

を再整理し、踏査の足跡として一冊の本にまとめ出版したものです。

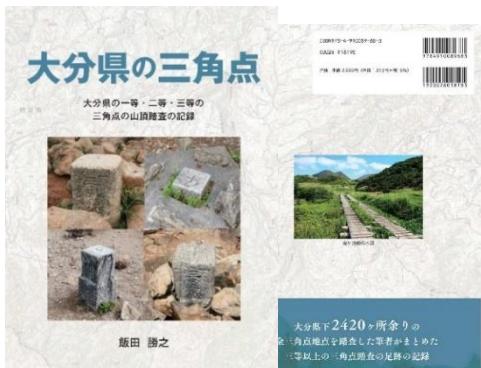
県内の山を練り歩き、山頂に立ったときに「点を訪ね、確認する行為」が自分の中に加わった。これまで通り過ぎていた石標が、その場所の歴史や人の営みを静かに物語っている存在であることに気づかされた。実際に現地に足を運ばなければ分からぬ地形の細かな特徴や、藪・尾根・取り付きの難しさなどが具体的に書かれており、机上の地図だけでは得られない実感が伝わってくる。派手ではないが、山を「歩いて確かめる」ことの面白さと奥深さが伝わってくる一冊です

各三角点の点名とその読み方、冠字選点番号、所在地名、経度・緯度、選点・設置の年月日、三角点の様子（標石の設置方位やの欠損具合、保護石の有無など）、10万・5万・2万5千分の1の各地形図名、設置箇所の地形や植生や場所の特徴、踏査ルートとそのルートの参考タイムなどを、各地点毎に簡略にまとめた資料となっています。

県内のマイナーな山や、バリエーションルート探索や、三角点マニアなどの趣向の方には興味ある資料と思われます。

また、貢間にある三角点踏査に関するコラムや随想も読んで見ると面白い。

令和8年1月末から大分県下の主要書店で販売される予定です。価格（消費税込み）2,000円・支部会員には特別価格（1,600円）



支部からの報告（会務報告）

支部会議開催報告

第1回役員会 11月7日(金)

大分市西部公民館

1. 忘年山行登山について
2. 交通費について
3. ヒヤリハットについて
4. 他

第2回役員会 1月8日(木)

大分市西部公民館

1. 120周年記念式典報告
2. 研修・月例山行の報告
3. 次回の催事、山行について
4. 他

第3回 支部役員会開催予定案内

日 時……令和8年3月13日(金)
場 所……大分市西部公民館 18:30~

支部ルーム開催状況

11月7日(金) 大分市西部公民館 出席者 14名
12月5日(金) 大分市西部公民館 出席者 2名
1月8日(木) 大分市西部公民館 出席者 10名

支部ルーム開催予定

2月6日(金) 大分市西部公民館 18:30
3月6日(金) 大分市西部公民館 18:30
4月3日(金) 大分市西部公民館 18:30

登山教室のお知らせ

▼第8回講座（実地研修）八面山周回
実施日……3月1日(日)
所要時間： 6時間程度（見込み）
集合場所……八面山平和公園駐車場
集合時間……午前8時00分
申込期限……2月27日(木)
担当……佐藤 裕之
参加申込先……sa10h1952@ymail.ne.jp
※地図 土佐井 1/25,000

月例山行のご案内

1月月例山行：大船山 岳麓寺コース

実施日……1月25日(日)

所要時間： 6時間程度

コース……登山口～柳ヶ水～入山公御靈廟を経て
～大船山～往路下山

集合場所……岳麓寺登山口駐車場

集合時間……午前8時00分

参加申込期限……1月20日(日)で締切ました

担当……佐藤 彰

参加申込先……akiraguitar1015@yahoo.co.jp

※地図 湯坪・大船山・久住 1/25,000

2月例山行：尺岳～福知山縦走

実施日……2月8日(日)
所要時間：8時間30分程度
距離……18km程度 縦走 長いです
集合場所：時間 道の駅たのうらら 5時00分
又は 鰐渕ダム下駐車場 7時00分
登山口……管生の滝 下山口 鰐渕ダム
参加申込期限……1月31日(土)まで
担当……佐藤 裕之
参加申込先…sa10h1952@ymail.ne.jp
※地図 徳力・金田 1/25,000
※豪雪時は、上野峠から福知山周回に変更の可能性あり

シニアトレッキング 白石山

実施日：3月8日(日)
所要時間……歩行時間 4時間
集合場所……一本松峠
集合時間……午前9時00分
申込期限……2月25日(水)まで
担当……下川智子
参加申込先…(笠井美世) mmykasai@nifty.com
※地図 坂ノ市 1/25,000

3月例山行：砲台山～足立山縦走

実施日……3月15日(日)
所要時間：歩行時間 7時間
集合場所：戸上神社 駐車場
集合時間：午前6時45分(集合後、下山口に車を移動)
参加申込期限……3月8日(日)まで
担当……中野 稔
参加申し込み先…zermatt1111nm@gmail.com
※地図 小倉 1/25,000

4月例山行：阿蘇高岳・中岳(仙酔尾根ルート)

実施日……4月12日(日)
所要時間……約6時間程度
距離……約7km程度
集合時間場所…仙酔峠登山口8時、又は戸次に6時
(乗り合わせ希望の方は、ご連絡ください)
参加申込期限……3月31日(火)
担当……笠井 美世
参加申込先…mmykasai@nifty.com
※地図 阿蘇山 1/25,000

新人会員の紹介

- 会員 下坂佳浩 会員番号 17570
- 会員 一色浩幸 会員番号 17578
- 会員 土谷美穂 会員番号 17601

後記

- 早朝の山道を登っていた時私が「もうがんこ」があると言ったら同行の女史が「何それ」と聞いた。「ちらのことだよ」の答えにも、説明をつけないと解ってくれなかった。百姓の子供でしか分からない。
- ・大分弁で主に、大分川から北の方の人がそう呼ぶらしい。ちなみに私の子供のころは「ようらく」と言っていた。瓔珞(ようらく)とは仏像などの横に垂れている飾りのことだが、つららを瓔珞と言わせた私の故郷(大分市松岡)はちょっと上品であったんだネ!ななんて・・・
- ・ヨウラクツツジも、その仏具になぞらえたなまえだ。そのようらく(つらら)が子供のころは平地の道端のいたるところで見られたが、この頃はちょっと珍しいくらい少ない。これも地球温暖化?

(K・I)



東九州支部報

・支部には『新大分百山』(登山ガイドブック)の在庫があります。まずは大分の百山から歩きはじめてみませんか?

購入をご希望の方は中野までご連絡ください。価格は2,420円です。

・過去の東九州支部報(バックナンバー)はこちらから閲覧できます。
・次回の原稿締切は3月末となっております。

よろしくお願いします。(M・N)

zermatt1111nm@gmail.comまで

公益社団法人日本山岳会東九州支部 東九州支部報 第112号

2026年(令和8年)1月25日発行

発行者 安東桂三

編集者 中野稔 飯田勝之

発行所 事務局

〒879-1113 大分市中判田15-55 阿南方

TEL・FAX 097-797-7120

E-mail beca5844@oct-net.ne.jp

支部からのお知らせ